

ほのあかりの岬で 夜の呼吸に出会う

忘れていた呼吸が、
岬の夜にそっと戻ってくる。
心の奥の乾きを、優しく溶かす物語。

=====

物語の主人公・山岡千紗。東京で企画職として走り続けてきた。誠実で、頼られ、期待にも応える。けれどここ数年、胸の奥のどこかに“乾いた場所”が静かに広がっていた。忙しさに紛れて後回しにした気持ち。本当はいつか向き合いたかった感情。その小さな違和感
は誰にも言えず、そっと心に積もっていった。そんな折SNSで偶然見かけた大瀬崎の海と富士山がひとつに溶け合う一枚の写真。

その青に、なぜか心を掴まれる。「ここなら呼吸を取り戻せる」ただその直感だけを頼りに、彼女は岬へ向かった。大瀬崎で出会う自然、人、そして静かな夜の時間。そのすべてが、千紗の内側に眠っていた深い呼吸をそっと呼び覚ましていく。

=====

プロローグ

ほのあかりに導かれて

東京駅で新幹線に飛び乗って、わずか45分。三島駅のホームに降り立った瞬間、冬の光がやわらいで見えた。

最近、胸の奥に小さな砂漠ができる瞬間が増えていた。仕事は好きだし、仲間にも恵まれている。それでもどこかで、心の奥の

方がそっと乾いていくような感覚があった。そんなとき、偶然 SNS で見かけた一枚の写真。岬の先に富士山がひとつにつながる風景が、胸にすっと入り込んできた。この青に触れてみたいと思った。それだけで旅の予約ボタンを押していた。

「山岡さま？お待ちしておりました」
ネイチャーイン大瀬館の送迎ワゴンの前で、ドライバーの渡辺さんがにこやかに会釈した。
右側の座席に身を沈める。しばらくすると視界いっぱい、海と富士山が広がった。

「ここから県道17号です。海と道が同じ高さなんですよ。奥駿河湾は、波が本当に穏やかなんです」

渡辺さんの言葉が終わるか終わらないかの、その時、窓の外の光景に息をのんだ。道に寄り添う海の向こうに凜と佇む富士山が突然現れたのだ。海と山が、まるで一つの深い呼吸でつながっているように見えた。同じ伊豆なのに・・・熱海とも伊東とも全然違うんだ。海辺を30分、県道から大瀬崎の看板に沿って小さな道にそれた。うっそうとした森のトンネルを抜けると、突然視界が開けた。そこに赤い屋根のネイ

チャーイン大瀬館が現れた。玄関前で足を降ろした瞬間、海風が頬をすっと撫でる。胸の奥の、乾いていた場所にほんの少しだけ、水が染み込む感覚がした。

『あ、ここだあ・・・来てよかったあ』

玄関をくぐる。その先に広がる窓辺の風景に、思わず歩みが吸い寄せられた。中央の主柱に掛けられている額縁が目にとまった。タイトル「ほのあかり」と書いてある（＊巻末に解説あり）。海の静けさと森の深さをひと粒に閉じ込めたような作品だ。茶道具が並ぶその造詣から温かい湯気が立ち上るようだ。型染め絵とのこと。

しばらく眺めていると、背中にそっと人の気配が近づく。

「とっておきのオーシャンビューでしょ。これを、今度は秘密のお風呂からも試してみませんか？」

声の主は、フロントで出会ったばかりの女性。真木久美子さん。いたずらっぽい、ささやきが、まるで子どもの頃の、秘密の提案みたいで思わず笑ってしまった。

その笑いで、胸の奥の固まっていた何かが溶けていく感じがした。スーツケースは不思議なほど軽くなり、久々に味わうルンルン気分だった。

第一章

小さなギャラリー

エレベーターホールに入ると、左手の壁一面に並んだ、四季の絵がふわりと目に入った。春、夏、秋、冬だ。

どれも大瀬崎の空気をまとっていて、特に冬の絵には、こたつでみかんを食べる母と娘の姿が描かれていた。

その温もりのある絵に足が止まり、胸の奥がじんわりとあたたかくなった。

こんなこと、しばらくしてないよなと
じんと来た、その時・・・

「そちらの絵も先ほどの型染め絵と同じ、
小山佐和子さんの作品です。そのお部屋、
今日お泊まりいただきお部屋なんです」
真木さんがそう言って、小冊子を差し出し
てきた。『Ocean Alps Balcony
Passport』と書いてある。裏表紙を見る
と、カラフルなロゴが現れた。富士山、駿
河湾、足高山、大瀬崎の水平線・・・
すべてが一本の線でつながっていた。
聞くと、ネイチャーイン大瀬館の理念は、
「かけがえのないつながりをつくるところ」
これを一筆書きのデザインで小山さん
が形にしてくれたのがカラフルなロゴだっ
た。

「小山さん、最近ダイビングデビューしたんですよ。娘さんとビーチで拾った貝でランプシェードも作ってくれていて。夕食のあとBARタイムの時にご案内しますね」
真木さんの表情が晴れやかだった。

人の営みも、自然の呼吸も、この岬ではひと続きの線のようにつながっている。その気配が絵の前に立つだけで伝わってきた。

ああ、ここに来てよかった。

胸の奥のどこかが静かにうなずいた。

第二章

海の紋様

客室のドアを開けた瞬間。息をのんだ。
大きな窓いっぱいに広がる海。青でも緑でもなく、ただ生き生きしている色だ。

その先には、淡い灰青に溶ける山々。
まるで、水平線に浮かぶ水墨画。
この窓は東向きだから箱根の山並みだ。
アウトドアチェアに腰を下ろし海面に目が止まった。えっ？今何か動いたよね？
波でも風でもない。よくそしてじっと見ると模様が、海の表面をゆっくりと這うよう

に生まれては消える。まるで海自身が呼吸しながら、言葉の代わりに紋様を描いて私に語りかけてくるようだった。

ふと振り返るとテーブルの上に、みかんが三つとメモ書き。

『このみかんは由良（ゆら）。

年が明けたら寿太郎もぜひ。』

ひと房口に含む。驚くほど甘かった。その甘さが胸をすっと抜け、頭の深い場所にまで届いていく。いつぶりだろう、こんな深い味わい。

ふと真木さんの声がよみがえった。

「お風呂の夕暮れ、ぜひ」

私は立ち上がり、貸切風呂の鍵を手にとって部屋を出た。

第三章

富士山の湯、ともる

同じ三階の廊下の突き当たりに
「富士山」と書かれた扉があった。

ガラガラと開くとふわり、とした空気が頬
を撫で、ほんのり杉の香りが漂う。

大きな窓に二面を囲まれた湯船の向こう
で、夕暮れの海が金色に揺れていた。

湯に足を入れた瞬間、張りつめていた心身が「すっ」と溶ける。

金色の海。

みかん色に染まる富士山。

淡い紫の空。

湯に沈むほどに日常の音が遠く遠く離れていく。ああ、素の私が戻ってくる感じた。思わず涙が滲み、あわてて空を見上げた。

「今宵は、きっといい時間になりますよ」
誰が言ったわけでもない。でも確かに聞こえた気がした。

湯から上がると身体の芯までぽかぽかで、
鏡には少し柔らかくなった自分が映った。

第四章

浜の風にふれる

湯上がりに外に出てみた。
風が静かに変わっていた。

夕暮れの浜辺は群青、橙、薄紫、重なり合
うように微妙な光の層に包まれていた。
寄せては返す波音が、胸の奥の固さをほど
いてくれる。

沖に小さく揺れる漁火の光。海に溶ける夜のはじまりだった。こんな時間が、この世にあったんだ。

背後から声がした。

「こんばんは。夕涼みですか？」

白髪まじりのやさしい眼差し。

梶原シェフだった。

「夕食の準備ができております。

よろしければどうぞ。」

自然に笑みがこぼれた。梶原さんが指さす方向に、あたたかな灯りがにじんでいた。

「このイカダテラス、日中は富士山に旅立つイカダみたいです。海風がとても心地よいところです」

私は『駿河湾まんなか食堂』へゆっくり向かった。

第五章

土地の記憶をいただく

食堂に入った瞬間、ふわっとやさしい香りが迎えてくれた。

「今日は、大瀬崎の海と山のきょうだい料理です」梶原さんがそう言って微笑む。

前菜は、真鯛を柑橘でほんのりしめた静かな一皿。一口食べると、舌の奥にやわらかい記憶がほどけるような味わいだ。

「この土地は、素材のほうが勝手に話しかけてくるんですよ」梶原さんがそう言った。

二の膳、三の膳と進む。海と塩の香り、森の湿度、そして冬の空気の冷たさも一緒にそれら全部が一皿に染み込んでいた。

これは料理ってというか・・・この土地そのものじゃん！

最後はデザート。柑橘の香りにほのかな苦みが、寄り添うひと口。思わず涙がひと粒落ちた。

「ごゆっくり」

梶原さんの声が胸の奥に灯をともした。食堂を出るところには、身体の時間がすっかりほどけていた。

第六章

夜空に溶ける

外に出ると、空気がきゅっと冷たく澄んでいた。イカダテラスの角に立って海を眺め

た。海は暗闇ではなかった。深く静かな蒼だった。そして海面をよくみると、星が薄く揺れて浮かんでいる。これが地球の夜だ。呼吸を忘れるほど美しかった。

「ここ、ずっと座っている方も多いんです。特等席！」振り向くと真木さんがそっと立っていた。

「静かな夜って、何もしなくても満たされますよね」ふたりで海を眺める時間に心が温まった。まるで長い手紙の最後の一行みたいにしみていく。

「よかったら、バータイムもどうぞ」

階上の灯りの方へ、真木さんが誘うように
微笑んでくれた。

第七章

絵皿が灯す物語

ラウンジに入ると、小さな卓上暖炉の炎が
ゆらゆらと迎えてくれた。テーブルには、
カラフルな絵皿があった。

西浦みかんの橙、駿河湾の深い青、
森の土の茶、大瀬崎そのものの色が静かに
呼吸していた。

「このお皿、向きを変えると“表情”が変わ
るんです」真木さんがくるりと回すと、

模様が潮の流れのように動いた。

モエパリさんという作家さんの世界でただ一つの作品だった。胸がかすかに震えた。

そこに梶原さんが大事そうにお盆をかかえてやってきた。それは伊豆鹿、メヒカリ、甘藷チップを盛り合わせた土地の三重奏だった。

そしてネイチャーイン大瀬館の兄弟施設がある五島列島からやってきたGOTOJIN『波止場の詩』がそえられた。蓋を開けると、柑橘の香りに海風の影が紛れ込むような香りが広がった。

口に含むと静かな熱が胸の奥に広がって
いった。

私、今日ずっと生きている時間に触れている。
その思いが、ゆっくり満ちていった。

「大瀬崎の自然が、あなたを歓迎している
と思います」真木さんが静かに語りかけて
くれた。胸の奥までほっこりした。

第八章

夜更けの回廊

ラウンジを出ると、廊下の壁にあたたかな
灯りがすっと伸びていた。

歩きながら、もうひと呼吸だけ夜を歩きた
いなあ・・・そんな衝動が芽生えた。

窓の外を覗くと満月。その灯りの下で風と
木々と静かに語り合っているようだった。
東京ではずっと外側の呼吸で生きていたと
思った。でも今は違う。

内側の深い場所に呼吸が戻ってきている。
私は、自然に帰っているんだと気づいた。
部屋に戻りドアノブをそっと回す。そのま
まベッドに横たわって天井をみた。

「朝は、大瀬崎の岬を歩いてみよう・・・」

その瞬間、意識が静かにほどけて私は深い
眠りへと落ちていった。

(続く)

— 登場人物紹介 —

◎ 山岡 千紗 (物語の主人公)

物語の主人公、山岡千紗。東京で企画職として走り続けてきた女性。仕事は誠実に向き合い、周囲からの信頼も厚い。けれどもここ数年、気づかないうちに心の奥の乾きが広がっていた。忙しさに紛れて後回しにしてきた気持ち、本当は立ち止まって向き合いたかった感情。その小さな違和感は、誰にも言えず胸の奥で積もっていた。そんな折、SNSで偶然見かけた大瀬崎の海と富士山が一体になる一枚の写真に心を掴まれる。

「忘れていた呼吸を取り戻せる」そんなひと筋の直感に導かれるように千紗は大瀬崎にやってきた。そこで触れる自然、人との出会い、静かな夜の時間・・・彼

女の内側に眠っていた深い呼吸がそっと呼び覚まさまされていくようだった。

◎ 真木 久美子

ネイチャーイン大瀬館のシニアマネージャーであり、海を知り尽くすシニアガイド。自然と人の心の両方を読む不思議な感性をもち、海辺のネイチャーツアーを手がける。着物が似合う元芸妓のスタッフ、地元主婦のスタッフ、来月合流予定の中央アジアの青年など、多様な仲間を束ねる静かな大黒柱。

◎ 梶原 哲人

「駿河湾まんなか食堂」の料理長。フレンチの名手で湯河原の高級リゾート出身。釣りをきっかけに大瀬崎の海に魅了され住み込みの料理長に就任。地元農家・漁師と深くつながり、土地の記憶を宿す料理を目指している。

（＊）作品「ほのあかり」について

ネイチャーイン大瀬館のラウンジの大黒柱に展示されている作家・小山佐和子さん（punto a punto）の作品。この絵は、とても手間がかかる型染（かたぞめ）という技法で創作されています。まず型紙の模様を彫るところから。これはとても繊細な作業になると思います。そして防染糊と共に和紙の上に模様を描き、染料で染め、水洗いして糊を落とす。すると美しい模様が「浮かび上がる」。光の当たり方によって様々な表情を見せます。この絵をみたオーストラリア人が言いました。「作品の本質を創るのは、テクニックではありません。目と心です。海と対話し自然とつながる感覚、そのつながりを心ある人々と分かち合う喜びを味わう喜びがこの作品から感じられます」と。この作品の前に立つと、自分の中の深い呼吸とそっと重なる温かさが伝わってきます。ネイチャーイン大瀬館の滞在が心の再生へ導く象徴としてラウンジ中央の大黒柱に静かに灯されています。

続編予告

第二編「岬の朝を歩く少女二人」

夜の深呼吸が明けると、朝のしずけさが岬を包みま
す。水面の光、森の香り、そして海辺に佇む二人の少
女の物語が始まります。大瀬崎の新しい物語の扉を
そっと開いていきます。近日公開予定。

2025年11月27日

ネイチャーイン大瀬館 石井 清彦

公式サイト： <https://www.natureinn-osekan.jp>

Instagram： https://www.instagram.com/osekan_natureinn